

バングラデシュ最大の輸出額を誇る、衣料産業。国内各地の工場で作られたシャツやセーター、ズボンなどは、世界各国、とりわけ欧米諸国へ輸出されている。一方で、かつてこの国の縫製工場は、児童労働の代表とされる職場でもあった。

1972年、ダッカ市に創設された職業訓練学校UCEP (Underprivileged Children's Education Programs) は、工場や市場などで働かざるを得なかった子どもたち、あるいは仕事をしても相当の収入を得られなかった子どもたち、学校へ行けなかった子どもたちなど、貧困層を対象に開かれた学校だ。電気科、コンピューター科、自動車整備科、テキスタイル科など8つのコースの中には、縫製科もあり、現在、12歳以上の女の子85人が学んでいる。

もちろん学生たちは、UCEPに入學して、初めて先生から電気ミシンの使い方を教えてもらうことになる。ところが、UCEPの縫製科で教員養成活動に携わる、青年海外協力隊員の市橋文子いちはしあやこさんが最初に気付いたのは、電気ミシ

Close Up!

ジャイカのあしあと

[バングラデシュ]

子どもたちに 技術と 衛生意識を

真新しい制服を着て、初めてミシンを使う職業訓練学校の新入生。でも縫製の仕事に大切なことって何だろう？

文・写真 = 谷本 美加 (写真家)
text and photo by Tanimoto Mika



ンの技術ではなかった。スラム街など貧困層出身の少女たちは、たとえUCEPに入學したとしても、清潔な環境や新しい服とは無縁の生活をしている。食べ物モノの染みや埃にまみれた服を小さいころから着て、新しい服というものモノがどのような状態なのかを知らないのだ。おやつを食べた後、油のついた手でミシンや布を扱い、果物の種や皮が、平気で縫製作品に混じっているという状況が、当たり前だった。

UCEPは、他校に比べて優秀な教師陣が集まっているものの、先生方も衛生指導までは行き届かない様子。そこで市橋さんが生徒たちに手を洗い、ミシンをふいてから作業を始めることを指導している。苦しい生活から抜け出すために技術を身につけて、縫製工場への就職を希望する学生たちに、技術だけではなく、ちょっとした汚れで商品価値が落ちることを学んでくれたらと願っている。

